

兵庫県こころのケアセンター 平成19年度実施分に係る  
外部評価委員会 業績評価（総合評価）

所 見

- ・自然災害による被災者や事件・事故の被害者に対するこころのケアへの社会的関心が高まっている中、国内では類似の施設がほとんど見あたらないユニークな施設であり、コンパクトな組織と陣容で、創造的な活動に取り組み、着実に実績を積み重ねており、高く評価できる。大学の関連機関においても、このセンターのように充実した機関は見あたらない。
- ・もっとも、盛りだくさんの活動の割にはスタッフの数が少なく、負担が大きいのではないかと。特に医療機関等からの診療所への紹介が増えることは評価すべきことだが、それとともに、患者の重度化、治療の専門化・高度化への要求も高まってくるのが予想され、オーバーワークを防ぐ必要がある。
- ・研修、災害対策・派遣など、すでに定評のある分野では、これまでの活動を継続してもらいたい一方、開設から4年が経過し、研修・研究・相談・診療などが直線的及び危機介入的に行われた時期から、前方・後方支援を含めたサービスや研修・研究の、間接的で高度なものへの展開を図るべく、ターニングポイントに差し掛かっているのではないかと考える。
- ・例えば、被災地などの現場への危機介入を行うだけでなく、消防署員や支援者の質を高めるために、コンサルテーションやスーパーヴィジョンを重視する方向へとシフトしていく必要がある。なぜなら、災害や事件はいつどこで起こるか予想のできない状況にあり、常にセンターのスタッフが出向くわけにはいかず、現場の支援者を支援する体制をつくらなければ、センターのスタッフ自身がバーンアウトしたり、二次受傷を受けたりすることが危惧されるからである。
- ・また、研修の受講者数は毎年定員を上回っているが、既受講者に対する再研修などのフォローを含めて、一層効果的・効率的に実施することが期待される。社会的ニーズに応えるためには、研修指導者・研究者を養成する機能を強化することが重要となってくると思われる。ホームページを含め、国際的な発信も行えると、より真価を発揮できるのではないかと。
- ・加えて、カウンセリングの位置付け等、相談事業のあり方全般について、その評価の仕方を含め、再検討を行う必要がある。
- ・そして、これらのことを円滑に行っていくためには、センターが自らの創意工夫のもとに、より柔軟な運営が行えるような仕組みづくりが求められるのではないかと。
- ・今後は、長期的展望に立って、センターのあるべき姿を視野に入れつつ、活動全体の中で、重要度や社会への貢献度を測りながら、優先順位を付けたり、相互の関連性、相互作用を点検していく必要があるかもしれない。